

第二十六回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー 趣旨説明

なぜ〈唱題成仏を問う〉のか

三 原 正 資

本日、ここに、仏教が国を越えて交流する現在、東京大学大学院教授・蓑輪顕量先生、当研究所の主任を勤められた、赤堀正明先生、影山教俊先生、高佐宣長先生をお招きして、〈唱題成仏を問う〉を論議し、宗旨を闡明していただくことを心から喜ぶものです。

日本乃至漢土月氏一閭浮提に人ごとに有智無智をきらはず一同に他事を捨てて南無妙法蓮華経と唱ふべし。(定遺一二四八頁)

とは、宗祖が三秘を明示された『報恩抄』の一節です。なんとシンプルな教えでしょう。しかし、これこそがバラドックスです。かつて、私はシンプルな教えの底にある深い意味を思い、信じられない思いでした。しかし、このシンプルさの故に、唱題は世の苦しみに呻吟する多くの人々をひきつけてきたのです。

平成二十七年一〇月、この講堂を会場として、第一四回教団付置研究所懇話会年次大会が開催されました。仏教、神道、キリスト教、新宗教等、約二〇近い各教団研究所の人々が集った、その夕方の懇親会の席上のことでした。ひと

りの参加者の「日蓮宗では、お題目を唱えれば仏に成れるというのですか」という声が、会場を回っていた私の耳に届きました。その質問に対して、同席していた当研究所のメンバーがどう答えたか、それはわかりませんでした。

さて、この質問に対しては、『立正安国論』の一節

汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ。然れば即三界は皆仏国也。(略) 身は是安全にして心は是禅定ならん。(定遺二二六頁)

が、その解答となることでしょう。

しかし、その参加者のことばは私の心に残り、このセミナーのテーマとなった次第です。

『法華題目鈔』というご遺文があります。文永三年正月六日、当時としてはすでに晩年にさしかかったともいえる四五歳の宗祖が清澄寺において執筆されたものです。

巻頭の問答がたいへん印象的です。

南無妙法蓮華経

問て云く、法華経の意をもしらず、義理をもあぢは、ずして、只南無妙法蓮華経と計り五字七字に限て一日に一遍、一月乃至一年十年一期生の間に只一遍なんど唱へても、軽重の悪に引かれずして四悪趣におもむかず、ついに不退の位にいたるべしや。答て云く、しかるべき也。

ここには、明確に「不退の位にいたる」ということばで唱題成仏への道が示され、それは「法華経の不思議」によるものといわれます。

続いて『賢愚経』の「二鸚鵡聞四諦品」と「富那奇縁品」の所説を、宗祖は唱題成仏への助証として挙げられます。

小乗の四諦の名計りをさやぶる鸚鵡なお天に生ず。三帰計りを持つ人大魚の難をまぬかる。（定遺三九二頁）

「二鸚鵡聞四諦品」の内容を紹介しましょう。

仏陀が祇園精舎に滞在されていたときのことです。須達長者の家では二羽のオウムを飼っていました。オウムは人のことばをよく聞きわけ、修行僧が訪れると、家人に知らせるほどでした。

阿難尊者はこの二羽のオウムをかわいがって「苦諦・集諦・滅諦・道諦」という四諦の名を教え、オウムに記憶させました。オウムは樹を上ったり下りたりしながら、四諦の名をさえずつたのです。

ところが、その日の夕刻、狸が二羽のオウムを襲ったのです。次の日、阿難はオウムの死を知り、悲しみのあまり、精舎に帰ると仏陀に向かって「四諦の名を唱えたオウムの識神は、どこに生まれ変わったのか」と問うたのです。

仏陀は「四諦の名を唱えた二羽のオウムは、その功德によって天上界に生まれ、その後、人間界へ生まれ変わり、仏道を修行するであろう」と説かれたということです。

このことから、部派仏教の時代から、お経の「意をもしらず、義理をもあぢは」うことがなくても、読誦には特別の果報のあることが信じられていたようです。きっと、このオウムのように読経する修行僧もいたことでしょう。

『法華経』にも「是の法華経は無量の国中に於て乃至名字をも聞くことを得べからず」「法華の名を受持せん者は福量るべからず」（『法華題目鈔』に引用）と説かれています。インドの上座部仏教、紀元前後から成立した大乘経典の

瞑想にお詳しい蓑輪先生のお話しをうかがいたいところです。

さて、現在、イタリアで国際布教師として活躍している当研究所元嘱託タラビーニ・勝亮師（一九五五年生まれ）は『観心本尊抄に聞く』（日蓮宗新聞社 平成一四年）の中で最初に唱えたお題目について語っています。

私は十五歳の少年でした。（略）昭和四十五年四月一日、そのお昼ごろでした。学校の帰りに友人が「お題目を唱えてごらん」と勧めました。（略）ついに「は：い」と答えてしまいました。神さまの罰として、空から雷が落ちてくるのかなと思いい、空を見ながらお題目をはじめて唱えてみました。

でも唱えてみても雷は落ちず、逆にすごく大きな歓喜の気持ちかわいてきて、びっくりしました。

『法華題目鈔』冒頭の間答の内容のようなタラビーニ師の体験ではありませんか。

さて、文永八年五月に述作されたとされている『十章鈔』では、宗祖は次のように述べられています。

真実に円の行に順じて常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華経なり。心に存すべき事は一念三千の観法なり。

これは智者の行解なり。日本国の在家の者には但一向に南無妙法蓮華経ととなえさすべし。名は必ず体にいたる徳あり。（略）阿弥陀・釈迦等の諸仏も因位の時は必ず止観なりき。口ずさみは必ず南無妙法蓮華経なり。（定遺四九

〇頁）

ここでは、唱題と止観とが併修されています。そして、唱題には止観の功德が含まれていると考えられています。

アメリカ日蓮宗における唱題と止観のかかりについては、当研究所研究員マコーミック・龍英師の次のようなレポートがあります。

「観心本尊抄によれば、最も重要であるお題目こそ、まさに瞑想の伝統です。日蓮宗は唱題行の流れの中に瞑想行を取り入れているので、円頓止観の教えを代々継承してきたと言えます。（略）初めてサンノゼのお寺に行くと、月例の瞑想行の最中でした。しかも、円仏教で学んだ丹田瞑想だったのです。そのように感想を漏らすと、松田（龍紹）上人は「当然私たちは瞑想をします。仏教徒はみんな瞑想をするのです」と答えました。これを聞いて嬉しく思いました。（『アメリカ仏教を考える』所収「今日の北米仏教徒の推移」[This North American Buddhist Journey] 日蓮宗新聞社 二〇一五年）

袁輪先生はご著書の『日本仏教史』（春秋社 二〇一五年）の中で、この本は、仏教史を「止観の受容という一本の筋道の中に位置づけ」（まえがき）ようとされたものと述べられています。宗祖は、天台宗の伝統の中でどのように止観行を修されたのか、それはどのような形態のものであったのか、そして、唱題とはどのような関係だったのか。また、今、話題に上る東南アジアやアメリカの仏教から伝えられるマインドフルネス、また近年、瞑想がとりいれている唱題行とどのように関わるのか、先生のお話しを楽しみにしています。

さて、『十章鈔』に見られる止観と唱題の併修は、文永一〇年四月に著された『観心本尊抄』では、その結語

一念三千を識らざる者には、仏大慈悲を起し、五字の内に此珠を裹み末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。（定遺

に明らかかなように、一つのものとなっているようです。それも、止観は「理具を論」ずるものとされ、「事行の南無妙法蓮華經の五字」(定遺七一九頁)が選り取られます。

『観心本尊抄』では、巻頭に『摩訶止観』の一念三千出処の文が置かれています。そして結語では、一念三千という止観行は唱題におさめられたものとなっています。

そのことを可能にしたものが、次のお言葉でしょう。

釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ」(定遺七一一頁)

『観心本尊抄』では、題目の五字は「仏の種子」(定遺七一一頁)、「一念三千の仏種」(定遺七一一頁)とされています。ことあらためて止観を修して仏界の具足を観ずるまでもなく、現代の表現でいうと、ことさらにマインドフルネスを修することなく唱題によって仏界を具足し、仏に成るとされたと受け取れます。加えて、題目は「如来寿量品」に示される「是好良薬」(定遺七一一七頁)、「如来神力品」で上行等の「地涌の菩薩に囑累」(定遺七一一七頁)された特別の教えとされています。

宗祖は『撰時抄』にお示しです。

日蓮が法華經を信じ始めしは日本国には一帝一微塵のごとし。法華經を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝う

るほどならば、妙覚の須彌山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は此よりほかに又もとむる事な
れ。（定遺一〇五四頁）

ここでは、「お題目」を「唱え伝うる」こと、立正安国の化他行が「仏になる道」、法華経の示す私たちの〈物語〉
が示されています。

今、『立正安国論』『法華題目鈔』『十章鈔』『観心本尊抄』『撰時抄』と、「お題目を唱えて仏に成る」ことについて、
宗祖がどのようにお考えになられていたかを、きわめて簡単に私なりにまとめてみました。

さて、『宗義大綱読本』（日蓮宗新聞社 平成元年）には、『宗義大綱』の「6 成仏の意義」が次のように記され
ています。

本門本尊への信は、成仏の正因であり、その相は口業の唱題となり、身業には菩薩の道行となる。この菩薩道に
即した生活活動がそのまま成仏の相である。

さらに「成仏とは何か」が次のように解説されています。

仏教における究極の目的は、「仏に成る」ことにある。（一三三頁）

本宗の成仏は、先ずもって、本門の本尊を信じ、本門の題目を唱えるという信行の体験なくしては得られない
……（一三六頁）

日蓮聖人も遺文の随所に「法華経の行者」たることを強調され、「色読」（体験）を最重視しているのである。

したがって、成仏とは各自が信仰体験によって得られるものなのであるが、凡夫にとっては、なかなか到達することのできない困難な境地を指しているのではない。(二三六―七頁)

最も困難であると考えられてきた成仏が、誰れにでもできる唱題修行によって、得られるというところに、聖人の教えの最も偉大な特徴があるといえるのである。

このセミナーの課題はこれからです。

現在、曹洞宗国際センター所長をされている藤田一照師(一九五四年生まれ)は日本仏教を四つのグループに分けておられます。

- 一、葬式や法事の仏教
- 二、学者の仏教
- 三、お説教する仏教
- 四、修行する仏教

『アップデートする仏教』幻冬舎新書 二〇一三年)

本日の四人の先生方は各々立場はちがいますが、四の修行する仏教(者)であると、私は推察しております。

これまでの修行の積み重ねの上で、「お題目を唱えて仏になる」ことについての理解、さまざまの経験、直面した問題やその解釈あるいは悩みを含めてお話ししていただきたいと思えます。

そのために一つの例を挙げます。

二〇世紀に欧米に禅（ZEN）を広めた鈴木大拙師の仏教観に、私は関心を寄せて参りました。大拙師は、仏教の中では対照的に見られる禅と浄土の法門について、一九五七年、ニューヨークのアメリカン・ブティスト・アカデミーで講演された「浄土真宗と禅宗」の中で、次のように指摘されています。

禅宗と真宗には共通点があります。禅宗でも真宗でも共に求めるものは、私が「エンライトメント」と呼ぶもの、日本語でいう「悟り」です。真宗では悟りではなく、ただ「信心」(faith)と呼びます。しかし「信心」も「悟り」も同じことで、呼び方が違うだけです。（『大拙 禅を語る』アートデイズ 二〇〇六年）

これは修行した者でなくては言えない解釈です。

信モ亦意業ナルノミ（『教観進退略抄』 充治園全集第四編）

と論じた優陀那院日輝師（一八〇〇—一八五九）にも似たこの考え方にしたがうと、唱題、但信心唱とは「信心」であるとともに「悟り」であり、唱題成仏といえそうです。さきほどの『宗義大綱読本』には同じ趣旨が述べられています。四人の先生方は、たとえて言えば、赤子が乳をのむような但信唱題（フェイス）のさなかにエンライトメントの発見がおありになったでしょうか。それは、どのように現前しましたか。また、マインドフルネスはどのように関わるのか、おうかがいしたい点です。

私たちは唱題することによって、どうなるのか。はたして仏に成れるのか。あるいは仏であったことに気付くとい

うべきなのか。仏に成ることは、私たちが生きるといふことにどういふ意味を与えるのか。各先生方の修行者としての経験から、さまざまのお考えが吐露されることをお願いして、このセミナーの趣旨説明を終わります。